

岡 国夫* 隠 岐 の 植 物 (一)

Kunio OKA : Noteworthy plants and vegetations from Oki

Islands in the Japan Sea (1)

隠岐群島の植物について、この群島を主題にした報文としては、①三宅驥一：隠岐採集行(1898)、②徳淵水治郎：隠岐島植物分布論(1911)、③竹中要：本谷暖地性常緑闊葉樹林(1927)、④丸山巖：隠岐生物管見(1950)、⑤島根県(丸山巖)：国立公園候補地隠岐島、島根半島、三瓶山(1960)、⑥奥山春季：植物採集覚書、隠岐島(1962)、⑦岡国夫：隠岐植物方言覚書(贈写刷)(1967)などがある。ここでは上記の文献にもれているもの、その他気のついた事実などを記してゆきたい。

(1) モミとモミ林**

隠岐にモミ *Abies firma* SIEB. et ZUCC. のあることは①④⑤に記録されているが、それはただ、種の存在を list up したにとどまり、産状については何等の記録がない。また、日本列島のモミの分布を詳細に調査した林弥栄氏の『日本産重要樹種の天然分布』(1951)では隠岐は空白となっている。

しかし、実際は、隠岐は中国地方でモミを最も豊産するところである。とくに、島後(ドーゴ)は全島いたるところに、原生状態から二次林にいたるまでモミを生ずるし、島前(ドーゼン)の西島、中島にも産する。

モミ林はほとんど海面近くから海拔430mまで生じ、組成的には亜高木層、低木層にヤブツバキ、ヒサカキが優勢であるが、林床植物から、ヤブコウジ型とオオイワカガミ型の2型に分けられる。

ヤブコウジ型は中国地方本土の海拔600m以下に広く見られるものと大差がないが、隠岐では亜高木層、低木層にユズリハがやや目立つ。スダジイーヤブコウジ群集と結びつくものであろう。

オオイワカガミ型のモミ林(Table 1)は海拔180m~320mの尾根筋に見られ、高木層、亜高木層にクロベを、低木層にオキシヤクナゲ、サイコクミツバツツジを伴うのが特徴的である。これは安芸黒打山(海拔590m~670m)のコウヤマキーオオイワカガミ群落(佐々木、安藤・ヒロビアⅢ、1963)や石見匹見峡(海拔700m)のヒノキーツクシヤクナゲ群落(佐々木、ヒロビアⅣ、1965)に似たところもあるが、ヤブツバキ、ヒサカキが優勢である点で大いに異なる。安芸、石見のそれがツガ群団に属するに対し、隠岐のオオイワカガミ型モミ林では、ツガ群団ないしブナ群団の要素であるクロベ、ミズナラ、アカシデ、オオイワカガミ、ホソバカンスゲ、ツルシキミなどとともに、スダジイ群団の要素であるコジイ、ヤブツバキ、ヒサカキ、ヤブコウジなどが主要な群落構成要素として同一の植物社会を形成していることに注目したい。

従来、floraの上から、極暖地性の植物と著しい北方系の植物とがこの群島に混生する

* 山口農業高等学校 Yamaguchi Agricultural High School

** 昭和41, 42年度、文部省科学研究費(総合研究)による。

Table 1
Abies firma--*Shortia soldanelloides* Community
 Altitude 180~320m
 5 Quad.

	C	CV
1st tree layer		
<i>Abies firma</i>	V	4350
<i>Thuja standishii</i>	IV	1300
<i>Pinus densiflora</i>	II	850
<i>Quercus mongolica</i> v. <i>grosseserrata</i>	II	200
<i>Cyclobalanopsis salicina</i>	I	100
2nd tree layer		
<i>Abies firma</i>	III	950
<i>Thuja standishii</i>	IV	454
<i>Castanopsis cuspidata</i>	II	200
<i>Carpinus laxiflora</i>	II	200
<i>Cryptomeria japonica</i>	II	102
<i>Cleyera japonica</i>	II	100
& other 7 species		
shrub layer		
<i>Eurya japonica</i>	V	1650
<i>Camellia japonica</i>	V	1302
<i>Rhododendron nudipes</i>	III	1200
<i>Rhododendron metternichii</i> f.	I	750
<i>Carpinus laxiflora</i>	II	450
<i>Castanopsis cuspidata</i>	III	104
<i>Illicium religiosum</i>	II	102
<i>Viburnum wrightii</i>	II	102
& other 16 species		
herb layer		
<i>Shortia soldanelloides</i>	IV	3450
<i>Ardisia japonica</i>	V	652
<i>Carex morrowii</i> v. <i>temnolepis</i>	III	300
<i>Skimia repens</i>	II	200
<i>Struthiopteris niponica</i>	III	6
& other 10 species		

Fig. 1 モミ林 (隠岐, 那久)



ことが強調されて来たが、オオイワカガミ型モミ林では、群落的にもこのことが端的に表現されている。隠岐の植物相の現状は、スダジイ群団～ブナ群団の高度分布のひろがりか圧縮された形であるという見方もでき、これを理解するには、現在の気象条件、海流のことだけでなく、この群島成立についての地史（海進か、沈降か、またその時期）についての情報を手に入れることが必要のように思われる。

モミの大きい個体としては、布施村鷲ヶ峯の天然林で胸高直径 120cm のものを観察したが、このような老木にはナゴラン、フウラン、セキコクなどのラン科植物がしばしば着生する。このラン類が濫獲されて港の店頭にならべられている。このため山中のものは絶滅のおそれがあるので、モミの天然林を充分保護する必要がある。

隠岐のモミ林調査の機会をあたえられた東大農学部倉田悟教授に謝意を表する。

(2) サクラ属 *Prunus*

隠岐群島に野生するサクラ属のうち明瞭なものは次の 6 種 1 品種がある。

Prunus pendula var. *aseedens* (MAK.) OHWI エドヒガン

P. jamasakura SIEB. ex KOIDZ. ヤマザクラ

P. sargentii REHDER エゾヤマザクラ

P. sargentii f. *pubescens* (TATEW.) OHWI ケエゾヤマザクラ

P. verecunda (KOIDZ.) KOEHNE カスミザクラ

P. ssiori FR. SCHMIDT シウリザクラ

P. buergeriana MIQUEL イヌザクラ

以上のうち、ヤマザクラ、エゾヤマザクラ、カスミザクラは従来知られ、また実際各島に広く産する。

エドヒガンとイヌザクラは大満寺山の有木(アラキ)側の溪測で採った。ケエゾヤマザクラは西島の焼火山(タクヒサン)下部で採ったが、これは中国地方では三瓶山(丸山巖前出)にもある。

シウリザクラは布施村鷲ヶ峯の頂上に近い海拔約 500m の林中に少数混生している。大きいもので直径 10cm 程度である。本種は元来、本州中部、日光山麓以北、北海道、千島、満州、ウスリー(大井:日本植物誌)に分布することになっていたもので、著しい北方系の植物を更に加えたことになる。

総状花序をなすウワミズザクラ亜属のうち、常緑の 2 種を除き、中国地方としては、ウワミズザクラ、シウリザクラ、イヌザクラの 3 種となる。このうち、ウワミズザクラは日本列島に広く、かつ多量に産しながら隠岐には従来全く記録がなく、筆者も一本も見出し得なかった。これに対し、中国地方の本土には見られない北方系または大陸系のシウリザクラの方を隠岐に産することは注目すべきで、これはやはり、この群島成立の歴史とウワミズザクラ亜属の系統との関連において考究すべき今後の課題であろう。